昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十七年八月 十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十四巻 第八号
（通第三九七号）

目次

近角常音先生御法話……大字三右ヱ門記……(1)
三願転入に就いて……福島政雄……(6)
「そのまま」について……井上善右ヱ門……(12)
凡骨日誌抄……西元宗助……(14)
念仏詩抄……木村無相……(17)
蓮如上人を憶う……花田正夫……(20)

近角常音先生御法話

（昭和二十七年九月二十八日）

大字　三右エ門　記

エ……今年の……報恩講を営ませて頂くに当り、一昨晩帰ってまいりました。ここ両三年来私も身体の調子が悪くて東京を発つ時、来年の法要には会うことが出来ぬでないかと思い〳〵ながらこうして帰って来ました訳でありまして、身体の方は年と共に衰えて参ります、段々とそのようになって行きます。然しながら不思議な位にこうして帰って来られました。これまことに有難いことに思わせて頂く次第なのであります。

ア……折角こうした状態で帰ってまいりましたのでいろ〳〵とお聞き頂き度いと思うのであります。なか〳〵うまくお話ができるか分りませぬが、先程もあちらの部室で座って考えていましたのですが、これからお話申そうと思うことは、このお話は一度聞いて頂いたことがありますので、私細々ながら摂取不捨のことを聞いて頂きました。うね〳〵と廻り道のような話し方でしたがこの不捨のお話を聞いて頂いた覚えがございます。

エ……極端に申せば、吾々は仏様の摂取不捨の光明の中に摂め取って頂いているのであります。吾々が逃げようとしてもこの光明の中に摂め取られて逃げることが出来ぬ、それ程の広大極まりないお慈悲でましますと、そのように思わせてもろうて喜ばせて頂いているのであります。

最近も思うのでありますが、私共お見捨てないのお話を聞いて頂いているのであります。是れ嘘なれば大変なことで、不思議のお慈悲に遇い参らせて喜ばせてもらっているのでありますから、吾々が嘘言うているかどうか本当によくお聞き頂きたいのであります。

私も兄貴の言葉を聞きましてそれが意外のことでありましたから私は喜ばせて頂いたのでありました。これは兄貴も嘘を申したのでありませぬ、本当のことを言うてくれたものだから私も喜ばせてもらった。嘘か嘘でないか、信仰の話わかるわからぬにつけよく聞いて頂きたいのであります。

その摂取不捨のことに就いてよく聞いて下された方が今日ここへ来ておられますから、皆様もよく聞いて頂き度いのであります。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもい立つ心のおこるときすなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり、云々。

信心とは何を信ずるか、即ち弥陀の誓願不思議、摂取不捨の不思議を聞かせて頂いて有難う御座いますとなることであって摂取不捨の不思議の誓願、即ち我々の悪しければ悪しいで尚捨てぬと仰せある、斯くの如き広大のお慈悲なのでありまする。

蓮如上人のお文の到るところに、摂取不捨の御利益を蒙っているのであるとか、八万四千の光明を放って吾々を摂（おさ）め取って下さるのであると書かれてあるのであります。

どうも私共は当り前に考えているのでありまするが御慈悲と申すものはそれ程までに深いものであることを知らずにいたのであります。

先程申したように摂取不捨のことわりを聞いて下された方が此処へ来ておられる。あまりお話が中味が多いので何処から話せばよいのか判りませぬが、私共の処へ話を聞きに来る人々の中には、親鸞聖人がどうの、念仏称えるのがどうのと色々云う人があるのであります。東京でもその傾向があるのでありまするが、私共はお見捨てない仏さまのおまこと、是れ一つと申上げて今日に到りました訳は――皆さんのお尋ねかたが御見捨てないおまことをよい加減な話位に考えてしもうて念仏を称えることが善いことのように考えていることになっているのであります――何も仏さまのおまこと（真実）と南無阿弥陀仏とは一分の違いも無いのでありますが、二つものでないのですが、然しながら称えられる、喜べると此方の考えが重くなるのであるもの故、この幣風ある故、その様になり易いものでありますから兄貴も念仏を称えなさいと申しませんでした。

貴方どこが有難いのですか、と尋ねますと、お慈悲が有難いでなしに此方の喜ぶこと、称えることに力味（りきみ）が入ってしもうているのであります。お慈悲が有難いになっておらぬ、これを思います故に何もお慈悲と念仏が二つものでありませぬけれども、お慈悲を頂くということが何よりも肝要なことなのであります。私がこんなことを申していたということをどうか思い出して欲しいのであります。ここ取り損ないせぬ様に注意して頂きたいのであります。

今日はその摂取不捨のことを聞いて下された方がここへ来ておられる。その内の一人の方のほうがお尋ね下された御言葉、正信偈に書かれてあるのですが、一寸忘れて終うていますが、正信偈の中、これを一つやって見ます。

エ……帰命無量寿如来。南無不可思議光。法蔵菩薩因位時。在世自在王仏所……無上殊勝の願を建立し希有の大弘誓を超発せり、法蔵菩薩因位の時。仏に浄土のない仏様は無い、浄土の建立に依て色々あるとあります。

ア……五劫思惟之摂受。重誓名声聞十方、あまねく無量光無辺光無対光、不断難思無称光……一切の群生は光照を蒙る。本願の名号は正定の業なり、至心信楽の願を因としたまえり。エ……私若い時、兄貴からテストをされたことがありました。お前本願と名号とどちらが先に出来たかわかるか、と尋ねられたのでした。私は本願が先だと申したところ、兄貴はそれはあべこべだ、と申した。兄貴の云うには、われ〳〵をたすけたいばかりにお六字を造りたすけようとして下されたのだら、助けようとして下された仏の大決意の名号が先だ云々とのことでした。

如来世に出興したまえる所以は、唯弥陀の本願海を説かんとなり。この仏様とは釈迦如来のこと、ひとえに本願海を説かんがために此の世に現れて下さったのである。

私は、ア……兄貴に会わなかったなれば仕様のないことで終っていかねばならなかったであろうに、兄貴から教えて貰ったお蔭で此の世に唯一つ有難いのは唯仏の御本願だけが有難いものだということを知らせてもろうたことでした。本願をきいて信心頂くなどと持って廻ることはいらぬ、そのように考えるもの故間違うのであります。

能発一念喜愛心、エ……広大のお慈悲なることを知らせて頂いて喜愛の心を起す、これ無理に起すのではないのであります。有難いと感じた時、その時煩悩を断ぜずして涅槃を得る、凡聖逆謗斉しくお慈悲を頂く以上は誰であろうと一切合切、衆水の海に入りて一味となさしめられるのであります。

斯ういう訳で私自身も一代の間、歎異抄を読ませて頂いて殆んど六十年の間に及んでおりまする。

老少善悪を選ばぬと書かれてあります、長年思うていたこと——凡聖逆謗、凡夫、聖人、五逆、謗法の人であろうがお慈悲の前には無差別である。万人が偉くなることを思うてやまぬのであるが、お慈悲の上では一切平等、善導大師であろうと小人であろうと、誰であろうと、よしあし区別がないへだてない。

私はこの年になりまして改めて驚いているのであります。皆へだてない、選擇大宝海に入って——同一の信心により参らせて頂くということであります。

貪愛瞋憎の雲霧、常に真実信心の天を覆えり、われ〳〵煩悶すると滅茶苦茶になって収拾のつかぬ様になって終うのでありますが、聖人は、摂取の心光はつねに照護したまう、すでによく無明の暗を破すといえども、とある如くすでに、と書かれてあるのであります。

一切善悪の凡夫人、善人悪人の区別がないと仰せられてあります。こういう話は、私など永い間、善人と悪人の区別がないとつまらない、そうでないとお浄土へ参っても淋しい位までに思うていたのであります。

如来の弘誓願を聞信すれば、仏は広大勝解の者とのたまえり。此の世で一番分った人間であるという、仏の真の友達と仰せあるのであります。

弥陀仏の本願念仏は、邪見驕慢の悪衆生は信楽を受持すること甚だ以って難し、難中の難これにすぎたるはなし、このくだりは私得意になって何時もお話いたすところである。これ私の話を聞かれた或人の評であります。私はながい間分らなかった頃のこと、弥陀仏の本願念仏は、邪見驕慢の者には仲々これを頂くことが出来ぬと考えておりました。

この邪見驕慢の人間がどこで救われるのであるか、本来邪見であり驕慢であれば救われぬのであるが、その者が救われるのだと、聖人が何故この二つを並べて書いておかれたものであるか。

印度西天の論家、中夏日域の高僧方が、大聖興世の正意を現し如来の本誓は機に応ずることを明す、

と仰せられてある。この意味合は、吾々は何としても自分自身としては覚り得る、且つ救わるる方法を知らぬ、何事も東西分らぬものなる故に、それらの方々が愈々もって捨ておくことが出来ぬと次ぎ〳〵に現れて来られて——吾々は自分ではどうしようもない者故、其等の方々が大聖（釈迦如来）興世の正意を明らかに説いて下された。でありますから如来様の大慈悲というものはわれ〳〵機のものがらに応じてぴったり合うたものであることを明らかにして下された。

エ……肝要のお話申そうとしても思うところへ出ませぬが、このあたりで先の摂取不捨のことを聞いて下された人のお尋ねのことをお話し申してみます。

その方の申されるには、お慈悲のこと思わせて貰う場合に、自分の都合のよい時は喜べるけれども、不都合の時は喜ばせて頂くことが出来ぬ。笠をかぶった様になって終うてどうにも仕様がない。聖人は摂取の心光は常に照護したまう云々と書かれてあるけれども私など有難いと思おうとしても暗なれば何ともしょうのないことになってしまう。聖人も仕様のない時は煩悩の雲霧がかかっておられたこと

であろうが、従ってあの様に雲霧の下明らかにして暗なきが如しとお書きになったのは間違いで、わたしなど行き詰ってしまうと真暗である云々と。

然し常に照し通しである。従って吾々が煩悩を断ぜずして涅槃を得るとお書き下されてあるでないかと、このことをお話しつつ私自身自分の言い度かったところ、痛いところを突かれたと思えたのでした。

……中　略……

（註）ここの所にて重ねてのお話ありたれど記しえず、されど仰せの要点は中略以後のお話により分明

この不審のことは歎異抄の各条にも云われているところでありまして……一寸申上げてみますと十四条の

その故は弥陀の光明に照らされまいらする故に一念発起するとき金剛の信心をたまわりぬればすでに定聚の位におさめしめたまいて命終すればもろ〳〵の煩悩悪性を転じて無生忍をさとらしめたまうなり。この悲願ましまさずばかかるあさましき罪人いかでか生死を解脱すべきとおもいて一生の間申すところの念仏はみな悉く如来大悲の恩を報じ徳を謝すと思うべきなり。乃至、ただし業報かぎりあることなれば吾々如何なる不思議のことにも遭い、また病悩苦痛をせしめて正念に住せずして終らんにその間の念仏は申すこと難し、この間の罪は如何にして滅すべきにや。罪消えざれば往生は叶わざるか。……摂取不捨の願をたのみたてまつれば如何なる不思議のことありて罪業を犯しその結果念仏を申さずして終らんとも速やかに往生を遂ぐべし云々。

とあります。摂取不捨の誓願と申すことは向うさまから仏様の方からお慈悲の門を開いてその人が如何あろうともその人を迎えとろうとして下された。そういう大変もないお心ごもりのおてだて、即ち摂取不捨のお誓願なることを申し上げているのであります。

その様に聞かせて頂いても何時まで経っても分りませぬ頂けませぬと言うのでありますけれども、吾々皆自分の心持がどうのこうのと詮議して向う様の仰せを中々うけようとせぬのでありますけれども、仏様の憐れと思召す平等の大慈大悲に催されて摂取不取されてしまう。吾々逃げようとしても引きずり戻すようにおあきれない、それ程の大慈大悲でましますということを申し度いのであります。

以上でもって今日は終りにして、明日より又改めてお話いたします。

三願転入に就いて

福島政雄

第十九願のこころ

この願は、発菩提心と修諸功徳ということを説かれてあります。菩提心を発して、諸の功徳を修するのであります。仏の位にまで自分は修行して行き度いと願う人が、種々の功徳善根を積んで、至心に発願して、仏のみ国、まことのみ国に生れようと思う。そういう衆生があるならば、この生命の終りに臨んで、仏はその衆生の前に現れて導くようにしたい、というのがこの願のこころであります。

さてこの臨終に来迎されるという意味でありますが、私共が修養して立派なことをやった積りで居ります。そしてこれでまことの国に生れることが出来ると考えて居りますと、それを仏の方から御覧になりますと、それがいかにも憐れに見えるのであります。

あれで自分は立派な積りで居るが、その裏の裏まで見抜かれる仏様には、その姿が如何にも哀れに見えるのであります。善いことをしたと思う中に、よくない慢心がある、それをそれとも気付かずにいることが、仏の御目からはハッキリ見える。こちらはひとかどよいことをした積りでよい気持でいる。するとそんなことをしているのでは駄目だ。それでは何ともならぬ自分に目覚めていない。それをじっと見ては居られない、お前のところまで行って、臨終にまで行って叩いてやらぬば目がさめぬ。早く目をさまして、仏の国へ導き入れよう。善い事をしたことにひっかかって、まことの自分の姿に目覚めていないから、出かけて行ってそれをしらせるため臨終に迎えに行って、真実の世界に目をさまさせて、結局は十八願の世界に入れしめずには居られない、臨終来迎とはそう云うことであります。

目がさめて居ないから、そこまで行かねばならぬ、諸善万行にひっかかって、仏の国などは問題にしていない、自分は立派にやっている積りでいる。そこをもう一つ反省せ

しめて、虚仮であったということを解らせたい、それには迎えに行かねばならない。親を忘れていない者は、自然に親のもとに帰るが、親を忘れはてて、ロクでもない世界をさまよう者は、親が行って喚びさまし、親のもとに連れて帰る外にはない。だから臨終に迎えに行ってやらねばならぬとなっているのであります。

第二十願のこころ

次に二十願となりますと「十方の衆生、我が名号を聞いて、念を我国にかけて、諸の徳本を植えて、至心に廻向して、我国に生れんと欲わん者は、その願いをついには果し遂げしめなければ、正覚は取らない」とあります。

十方の衆生が仏の御名を聞いて、仏国に念をかけ、生れたいと考え、諸の徳本を植えて—徳本とは諸徳の本で稱名することを意味する—仏国に生れようと考えて、お念仏を自分の功徳として、それを一心に仏の方にめぐらしむけて、この功徳によって、仏の国に生れたいと願うならば、この衆生を果遂せずばとありますのは、結局はそれを我国に生れさせてやりたいという願であります。

この願で注意せねばならぬのは、念仏を申しますが、これを自分の功徳と考えて居ることであります。稱名念仏は、親のまことのいのちがこちらにひびいて、そこからあらわれ出るので、それは仏の功徳であるのに、自分の功徳の如く思う、頂きものを我物顔にしている。向うから一心に喚びかけられ「ハイ」とお答えしているだけなのに「ハイ」とお答えしたことを非常な功徳と考えている、向うから与えられた功徳をわが力と思うているのであります。

十九願を願う人を自力とすれば、二十願は他力中の自力と申すべきでしょう。喚びかけて下さるのは仏様だが「ハイ」と答えるのは自分だと考えている。喚びかけの声が徹して「ハイ」と返事申したのだから全く他力であるのに自分の力と持ちかえるのであります。言葉をかえると、自分は御信心を頂いた、まことの心がひらけた、自分は悔い改めて生れ更って立派になった、人間としても立派な道を歩む人になった、まあこういう考え方が二十願の人である。

信心は向うから開いて下されたが、自分は人間として蘇って立派にやっている、生れ更った、転心した、信仰の人として立派な人生の行路、道徳上の問題でも立派にやれるようになったと考えているのが二十願の人々であります。自分に信仰がひらけて立派な者となって、生活態度が立派になった。これは信仰から生れた自分のよい行い、よい働きであるとなっている。

これが何故不徹底であるかと申すと、一体人間が、そんなに立派になったと言えるのか。私なども二十六歳の夏、心機転換して、よい心持となり、これからすっかり変って

信仰上からよくやって行けると考えていたが、実際の生活を省み、三十歳、四十歳を過ぎて行きますと、自分は微塵もよくなっていないことがいよいよ知らされて参りました。人生の躓きを続けている。自分は信仰によって立派にやって行けない、実際問題につきあたると、相変らず躓きばかりで、本当の取柄が微塵もないことが知らされました。悔い改めて別人となり、立派な人間になり、あっぱれの信仰の人となったとは云えぬ。それどころか益々みじめな姿が現実の問題で見えて来るのであります。

これを具体的に打ち明けますれば、五欲の問題、財欲、色欲、食欲、名欲、睡眠欲について自分の問題となります。

第一の財欲、これは私の様な貧乏生活者には大した望みはかけられないので、始めから駄目と思って居りますが、決して清貧に安んじているとは申されません。歳をとるほど金銭のことに穢くなったと妻が申します。四十幾年の間、私の生活を裏から眺めて居て云うのでありますから、それが本当の私の姿でありましょう。若い頃は金銭にサラッとしていたが段々わるくなったと言われて急所を衝かれましたのであります。

次に色欲、男女の問題でありますが、これは全く、申すも恥しい慚愧至極の私であります。

更に食欲、食物につきまして、私は割合こだわらぬと若い時はよく言われましたが、歳と共に食物のこまかな味わいがわかり出しました。旅先などで「御馳走して下さるな」と云いながら御馳走を喜ぶ。決して嘘を言っているのではない積りですが、根本は食物に対してもいやしいとおもいます。味わいに対する感覚が年令と共に妙になりました。

今度は名誉欲でありますが、これは若い時からずっとあります。私は長い間、学位論文などは決して書かぬときめておりましたが、広島で西先生から、論文を書きなさい、と勧められ、東京の友人もそう申しますので、それを提出しましたら、スウッと通りました。すると始めの時の気持なら別に喜ばなくてもよいのに、実際は御本人の私が一番喜びました。名誉欲が暴露したのであります。

最後の睡眠欲でありますが、これは若い時から眠れないで薬を飲みます。今でもよく飲みます。眠れないから眠りたい〳〵となり、こういうことが続くと心持が病的になります。私には睡眠欲がこのような姿で現れて居ります。

五欲の問題はこんな調子で、実際の生活は散々であります。御信心がひらけて立派な人間になったと言うことはちっともないので、年令と共に自分の心が穢くなった、もっとも虚栄心があって、それほどひどくはないと思おうとしますが、実生活がきたないというのが本当の話であります。

仏のひかりに照らされると、今まで気付かなかった自分が

見えて来ます。すると念仏申すことが、自分の功徳となると言えない、そう思うことは親の仕事を我物顔にしていることと知らされ、この不徹底の者を、遂に徹底せしめて、まことの国に生れしめるというのが二十願の果遂の願のこころであります。

第十八願の味わい

この様に味わって参りますと、十九、二十、十八の三つの門があるが、入って見ると結局十八願ひとつにおさまるということになります。十九願のように、自分が道徳を守り善根功徳を積んでいるなどと思ってよい気持になっていたのは間違いであった。又二十願のように、自分は仏にすなおにしていたと思ったのも嘘であったとなり、十八願の仏のまことひとつで救われるということろに落着かせて貰うのであります。

然もこの自分の姿というものは、五逆、謗法の姿であると照らし出されるのであります。

さて斯様に十八願のひかりを被むると、そこに落着いてしまって、もう十九願や、二十願に用事がなくなって了うたかと言うと、そうでないのであります。臼杵祖山先生からそこを次のように聞かせていただきました。

「三願転入とは十九願から二十願に入り、更に十八願に転入するのであるが、いよいよ十八願におさめしめられると、そこで万事解決して、信仰一点張りでサラッとするかと云えば、実際はそうはいかぬ。十八願の世界に転入せしめられて、そこに腰をいれてみると、十九、二十の世界に迷うて行く自分の姿が見えて来るものである」

このように臼杵先生が云われました。十八願で万事解決と、お厨子の中に入りこんで、仏と二人きりに居るとなるのではなく、十八願に徹するとは、五逆、謗法の姿が見えると、矢張り十九、二十の願にさ迷うている自分の姿も見えてくるのであります。十九願や二十願から足を洗うて了うたのではなく、十八願に腰を下して見ると、まだ十九、二十にさ迷うている自分の姿がはっきりと見えて来るのであります。成る程、私自身の生活の歩みはそうであります。十八願の仏のまことひとつに目ざめたのはほんとうであるが、十九、二十の願の世界、修諸功徳や、至心廻向の心からスッかり離れているかと云えば、そうではなく、そこに未練を感じ、割り切れぬものがあり、自分は悪人には違いないが、すこしは善いことをしている。自分は何も出来ないので、仏の慈悲と智慧で救われるのだと本当に思うが、けれども、自分と云うものがすこしも価値のないものとなっては淋しい、そこに何処か未練が残る。二十願の上で云えば、これでも親を思うている。だからすなおに「ハイ」と返事をしているという未練があるのであります。

斯様に十八願に腰を下しているのは本当であるが、十九、二十の願と没交渉になっているのではない、何となく未練の情にひかれている。そういう様に何時まで経っても、自分は善いとしか思えぬ者を憐んで下さる。またすなおに親に向っていると考えて得意になっている、するとそこにこれを憐んで下さる仏の涙がかかって来るのであります。十九、二十の願に未練を持ってさ迷う私に、仏の慈悲と智慧が働いて下さる。斯様に私の生命の上に、仏の生きたまことが働いて下されて、十九、二十に迷う心持を常にとかされて参るのであります。これが私の十八願の味わいであります。

十九願、二十願は、このような生きた関係を持ちながら十八願に摂取せられて行くのでありまして、三願転入ということは、これで万事解決ということでなく、この世の生命の続く限り、生命の終りまで、常に三願転入し続けているというのが、私の実際の姿であります。もう十九、二十の願には用事が無くなったと云うのではないと臼杵先生からうかがって、そこをよく感じましたのであります。

これは機の深信といってもよいのかも知れません。機の深信から法の深信に帰ると云ってもよいが、十九、二十の願を細かに考えると、機と法の深信になるのかも知れませんが、味わいの道筋が何処か違ったところがあると思われます。それですから信仰は何月何日からきりがついて、立派な生活を純信仰者としてやって行けるというものではないというのが私の問題であります。

むすびの言葉

私はこう云うことを味わいながら、今度の大戦の前に次の様に譬えて見ました。

今ここに、戦場に出掛けて行く人があるとしましょう。その中には、今度は立派な働きをしたいと考える人もありましょう。

また帰還して自分はそうは思わなかったが実際に金鵄勲章をいただいた。すると矢張りよい働きをしたのであろうと思う人もあろう。

然し乃木将軍のような方は、自分は功一級を戴いたが、自分は陛下の赤子を何千何万と戦死させているので、金鵄勲章を戴くにはあたいせぬもので、誠に相済まぬと考えているのであります。

この譬で、第一功名を立てて金鵄を貰おうとするのが十九願の人で、第二の自分はそれほどまでに思わなかったが金鵄を貰ったのだから働きもあったというのが二十願の人でありましょう。更に純粋になると乃木将軍の境地でありましょう。これが十八願の境界であります。

三願の精神を今一度言い換えますと、十九願は、出来る

限り人間のことを尽そうとする態度であります。新島襄先生は基督教の人で、同志社大学を創設せられた人ですが、徹底的精進努力の人で、「刀折れ、矢尽くるとも、やむこと勿れ」と飽くまで人間のことを尽せと申されていました。これが人事を尽す世界でしょう。

二十願は「人事を尽して天命を待つ」人事を尽すが、その及ばぬところは、天命を待つ。この上は神なり、仏なりの御心のままにというのであります。

十八願は「天命を信じて人事を行う」という世界であります。そこに心のゆとりがあります。人間のことを行っているが、それが皆駄目になると解らせて貰うている。然し自分がすっかり包まれている天命を信じて、自分の行うべきことを行い、どんな時でもヤブレカブレにならない人生の余裕が出来ている。これが十八願の信の旅行く人の姿であります。

斯様に三願転入ということを銘々に自分の生活の上にあてはめますと、三つの願が自分の生活の上に生きて働いていることを知らされます。聖人は生きた念仏を勧められていられるので、信心為本とは、現実の人生問題をとり入れて居られます。そこに聖人が生きて導いて下さるものがあります。以上が聖人の仰せられた三願転入についての私の味わいであります。

「仏灯をかかげる」　松本　解雄

ともすれば　みだれがちなる我が心
　　みひかり高く　仰ぐ今日しも

日は高く　のぼりてあるに　かたくなに
　　などくらやみに　心向ふや

（昭四〇・十二・五日）

○

物に倚る生活を離れねばならぬ。如来による生活に帰らねばならぬ。如来、我を喚び給う。我人生の旅路に苦しみあえぎ、我たよるべき何物もない。ただ一刻一刻苦痛を増すばかりである。

その時、はからずも「汝来れ」と喚び給う。そのみ声に、まっしぐらに聴従す、これ信仰の極致なり。

非常時—人生の非常時は、われわれの立っている現在である。

（昭八・十一月）

「そのまま」について

井上善右ヱ門

「そのまゝ」とは、己れを忘れることである。これは先師のお言葉ですが、私にはまことに有難い仰せとして深く胸にきざまれています。「そのまゝ」という言い表わし方は、いつの頃から始まったのか知りませんが、古語の上にこれを求めるならば、「自然法爾」という言葉にも通うでありましょう。それは深い廻心の体験の上に生れる言葉であって、決して安易に放言できるような言葉とは思われません。今日「そのまゝ」といわれている意味とこゝろをめぐって、古く親鸞聖人の当時からいろいろな取り違いがおこり、それが邪執にまでなって聖人のお心を痛めたことは御消息集や末灯鈔の随処にうかがうことのできるところであります。

「そのまゝ」ということが、もし安易に現実の煩悩を肯定する言葉と受け取られ、いわばそのまゝの上にあぐらをかく事となるならば、それは最早や念仏とおゝよそゆかりのない生活に堕在することゝなりましょう。しかもそれが宗教生活の真髄でもあるかのように主張されるにいたると、いわゆる造悪無碍の邪説となります。

ところがその反対に、煩悩を肯定する誤りを斥けようとして、賢善精進こそ念仏の必要条件であると考えるようになると、歎異抄に述べられているように「後世者ぶりして、善からん者ばかり念仏申すべきように思い、或は道場に張文して何々の事したらん者をば道場に入るべからずなんどという事、偏えに賢善精進の相を外にして内には虚仮を懐けるものか」とあるような誤りに陥ることゝもなります。

今日真宗信徒の無力化が批判の的となるのは前者のそのまゝ主義によることが多いようですし、また真摯な青年の聞法者が抵抗を覚えるのも、そのまゝという安易な姿勢に対することが多いようです。しかしそれは安易どころか、実に厳しい自己追究の末に開かれる目ざめであって「日ごろの心にては往生かなふべからずと思ひて、本の心をひき

かえて本願をたのみまいらするをこそ廻心とは申し候へ」と示されてあるその廻心の上に開かれる新しい生命に裏づけられたものであります。

造悪無碍に傾くことも、賢善精進に陥ることも、要は人間の自執のはからい心によるものです。人間の相対的思慮に立つかぎり、そのいずれかとならざるを得ません。それが人間の心というものです。その自執自力の心がひるがえるということは容易ではありません。ながい聞法のすえ、とう〳〵本願真実にほだされて、己が心を放ち忘れて、たゞほれ〴〵と本願を仰ぎまいらするところに「そのまゝ」という新らしい生命の光が恵まれます。

両端の偏執からわれわれが救われるということは、如来の智恵をたまわるより外に道はありません。「弥陀の智恵を賜りて日ごろの心をひるがえす」と云われてあるのがそれであります。如来の智恵に照らされて「そのまゝ」にして救われるのであります。煩悩が許容されるのでなく、煩悩が救われるのであります。「そのまゝ」には、救われた感激がたゞよいます。

もし「そのまゝ」が摂取にあずかる以前の心の延長であって、たゞ煩悩是認の安心であるならば、どうしてあの聖人の悲歎述懐の叫びが生れましょう。「そのまゝ」でよいなら、たゞそのまゝでそれ以上の何事もありえず、そのまゝは「もとのまゝ」になり終ります。摂取の心光に浴する「そのまゝ」には、日ごろの心には見出しえなかった慚愧と歓喜の交錯する不思議な統一の輝きが現われます。

才市翁のうたに

浅まし　浅まし　浅ましや
なんぼ書いても　浅ましや
なんぼ言うても　みてはせん（尽きない）
みてぬはずだよ　底がない
ありがたい　ありがたい　ありがたい
なんぼ書いても　みてはせん
みてぬはずだよ底がない

○

あなた方は　わしの心を
知っちや　おんなさいますまい
わしの心はこの通り　浅ましい心であります
思うほど浅ましい　わしの心よ
思うほど　ありがたいのが親の心よ
なむあみだぶつの　尊さよ

才市さんの信心から、ためらいもなくかぎりもなく、ほとぼしる天衣無縫といってよいその言葉は、私の心の髄に喰入るひゞきをもっています。（十九頁下段に続く）

凡骨日誌抄

——生きた不調法（ぶちょうほう）——

西元宗助

毎月、いろんな雑誌をいただく。その中で、心にとどまったものから、まず書かせていただく。

教育新潮社の「宗教」（6月号）に、円日成道先生の一文がのっていました。円日さんは、時には脱線なさることもあったと承りますが、めずらしく真摯な方で、わたしは衷心尊敬申しあげている。かってその御住持の福岡のお寺の、聖人御誕生八百年の慶讃法要に招かれたことがありますが、円日師はじめ御僧侶は皆々、墨染のおん衣で、それに若い青年男女のお参りの多かったことなど、そのすがすがしい想い出は、今もなお忘れがたい。

その円日さんの文は、「健康長寿をねがう心の裏がわ」というのでありますが、その中で心うたれたお言葉を左に抽き出してみる。

K子さんという脳性マヒの娘さんのあるときの言葉——

「でも、このごろ、ときどきですけど、自分のからだを拝むんですよ。ごめんなさいって」

わたしも、このところを読んでいて、円日さん同様、ガーンとなぐられるほど感動しました。そして恥かしくなりました。生れて七十三年、いちどだって自分のからだを拝んだことはなかったようでありますから。それから、こんなことも。

「あんがい、からだの強い人は、まわりのひとを傷つけているのかも知れません。兼好法師も徒然草（つれづれぐさ）のなかで、友達にしたくない人を七種類ほどあげていますが、そのひとつに〝病なく身つよき人〟というのがありました。（中略）だれかが云っていましたが、ひとは虫歯が一、二本くらいあったほうがいい、それがチクチク痛むたびに、心をまわりの人びとにくばることが出来るものだと。そして円日さんは更に、

「生きるということは、裏がえせば殺すということでは

ないのか、だからながいきするということは、それだけ多くの生命をうばうことにちがいありません。この事実を無視して長寿をねがうことは恐しいことではないでしょうか。なんの心の痛みもなく延命策に狂奔する風潮に、わたしは人間のすくいがたい傲慢を見てしまうのです。

昔から如来さまのお慈悲をよろこんだ門徒のひとびとの間に、〝生きた不調法〟という言葉がありました。今ではあまり使われないようになってしまいましたが、以前は挨拶がわりにもよく使われたものです。〝お元気ですか〟〝はい、もうお迎えが近こうございますわ、生きた不調法がありますけえなあ〟といった具合です。さいきん、新聞の投書らんで、この言葉にふれて、この言葉がもっている鋭い人生洞察の目に、あらためて驚きました云々」と述べていられる。

七十三の誕生を迎えたばかりの私、ナム（モ）アミダブツ、〝生きた不調法〟のお言葉を押しいただく。円日先生、ありがとうございました。なお先生の文章、あまり平仮名が多すぎますので、一部、勝手ながら、漢字になおしました。ごめんなさい。

○　○

百華苑から「信仰」誌も、毎月いただく。この月刊誌に「お寺の聞法板」を載せていられる巖教也さんは、福井県大野のお寺様でおありなさる。その六月号に、あるお寺の聞法板で、私はこんな言葉に出遇いました。それは、と前置きして、

信心が歩む
煩悩が歩む
いまを歩む
ここを歩む

それから巖さんは、小松の称名寺での安田理深師の追慕会に参加し、その本堂の柱に掲げられていた文字に、

苦悩を背負って
立ちあがる心を
信心という

という感銘深いお言葉がありましたと紹介していられる。理深師この世を去られて既に半歳になろうとしている。真の聞法者、仏法者でおありであった、御恩深し。

○　○

六月上旬、瀬戸内海の大三島（愛媛県）の万福寺さまに広島県の三原から船経由で参上する。はからずも旧自照誌以来の友人故木村誠一氏（学校教員、昭和三七年四月没、享年四七歳）が門徒であられたお寺であることを承って、そのご縁を深く喜ばずにはおれなかった。

まず誠一氏未亡人に案内されて、丘の上のお墓にまいる。

足利浄円先生揮毫の六字お名号の墓碑の前にて浅野純以御住職と共に重誓偈を誦する。なお御遺児たち、それぞれ成長なさり、末女の幸江さんもこの秋末には嫁がれるという、みな揃って参詣くださる。ここに『万福寺報』から妙好人誠一さんの歌一首。

生きも死も老いも病いも友にしてお慈悲の中に今日も生かされ

このお寺で深く感じたこと、さすが木村誠一氏の育てられたお寺さまだけに、参詣の方々、昼も夜も、ご本堂にいっぱいで、ご門徒のあいだに仏法の生きているということ、御老院もご住職も、わたしとの話題はすべて自らにして仏法の極意（信心）のことであったことである。わたしがそのことを讃嘆すると、これも誠一さん、いや、木村先生のお蔭ですと、若い住職御夫妻は目を輝かしておっしゃる。

なお老院三智先生はエスペラントの大家でおありで、仏教伝道協会の依嘱によって「仏教聖典」をすでにエスペラント（国際語）に飜訳され、近く協会から刊行されるという。歌もよく詠まれる。その歌集「母心無限」から二つ紹介させていただく

火宅無常煩悩具足そのままの日々を重ねて喜寿を迎えぬ。

弥陀仏の光明てらしてほがらかにいたらぬくまもなし家の内外に

露の輝き

田端　明

蓮の露夜明けの風にこぼれ落ち

人間年をとるに従って、過去の想い出が徐々に鮮明に浮き上がってくるのを実感するようになるというが、私もそれを思う今日この頃である。

私は学生時代、朝の散歩が好きでシェパード犬を連れ、津市丸の内にある藤堂高虎の城跡をかけめぐったものである。その城の濠に夏は美しい花をつけ、初秋には蜂の巣のような実を結んだ蓮が生育していた。その蓮の葉にたまった露は、すがすがしい朝の陽をうけ、真珠玉となって葉の中でころがりながら巧みに色彩を変えて輝いている。微風が吹くと、玉露は何個かに分裂して小さな真珠玉に化すのである。いま私は、暗黒の世界で生きてはいるが、あの蓮にたまった玉露の輝きを忘れることはない。

私たちの人生も蓮の葉の露の身かも知れない。いつ何かで、こぼれ落ち、はかなく消えてゆくであろう。その短かい人生を精いっぱい玉露の輝きのように生きてゆきたいものである。

（於愛生園）

（註）田端さんは病のため失明。（花田記）

念仏詩抄

木村無相

マチガイ

香師おおせに　　香師＝香樹院徳龍師
〝闇（やみ）の夜に
目をあけてみても
こちらの目からは
アカリは出ぬ〟

どれだけ聞いても
わかっても
こちらの目からは
アカリは出ぬ
出ると思うも
マチガイなら
出そうとするのも
マチガイなり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

同じことを

香師おおせに
〝五日や十日聴聞して
仏になろうと言うような
横着な心ゆえ
信が得られぬのじゃ
なんでもイノチがけで
聞けば聞こえる
別なことを聞くのではない
同じことを聞き〳〵すると

聞こえて下さるのじゃ〟
〝弥陀の名號となえつつ〟
そのオイワレを——
そのオイワレを——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

みんなやる

香師おおせに
〝親ひとり子ひとり——
それゆえ一子地とのたもう
親のタカラが
子のタカラなり
名號の大宝がわがものと
知らせていただかば
うれしゃ〳〵と憶念稱名
おさゆべからず——〟

〝ナム〟もやる
〝アミダブツ〟もやる
〝ナムアミダブツ〟
みんなやるとよ——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

しかるに

香師おおせに
〝三悪道の業がのこって
あるやら
三悪道へおつる業やらで
稱えられぬ——
しかるに
信あるも信なきも
稱えるようになったのは
如来のお慈悲のあらわれ
じゃ——〟

稱えられぬは
我が身の業
稱えらるるは
お慈悲ゆえ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

地獄でないと

香師おおせに
〝いろ〳〵と聞きおぼえて
それで心をさだめようと思
うても
その心では定まらぬ——
地獄へ堕ちる心ひとすじで
聞きさえすれば
如来さまのおおせが
聞きとうなる
うけたまわりとうなる〟

そのおおせとは
ナムアミダブツ
地獄でないと
聞こえぬと——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

——○——○——○——○——○——○—

十三頁下段に続く——

「しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」という大悲に摂め取られた大信に、法爾として「そのまま」の真実が輝いているのを感じます。

蓮如上人を憶う

花田正夫

私は岡山県の田舎で、一村こぞって真言宗の村に生れましたが、二十歳頃から歎異鈔に心うたれてずうと親鸞聖人に導びかれて参りました。そういうことで、真宗の信徒に一番したしまれている、真宗中興の祖である蓮如上人の『御文』には仲々親しむ機会がありませんでした。

三十五歳の頃、肺疾で二年余り静養いたしました時、病気が段々恢復して体力もつき始めた頃、真宗聖典を病床にあって黙読し続けました。その時、蓮如上人の五帖の御文と帖外のそれとを、繰り返し拝読して居りますうちに、同じことを手短かにさしよせられて、繰り返し〳〵御説き下さる上人の御親切に段々と気付かせて頂き、それからは、上人のお言葉が、御親切だなあ！と心に銘じ始めました。点滴が岩をも穿つに似た、長時不断の大悲心をそこに感佩申すようになりました。

その後、近角常観先生の御著書に導びかれて「信心のことは歎異鈔に極説してあるが、信の上の生活の指針は、蓮如上人の御一代御聞書にあるから、両書を大切に読むように」ということを教えられましてから、御聞書を縁にふれては拝読申すようになりました。

そこには、名月が中天に輝く時、万水がその影を宿すように、如来の徳光が、蓮師のお生活のいたるところに照り映えているのに驚きました。このように具体的な信の実生活の記録を縁といたしまして、簡結に、肝要ばかりを、繰り返し巻き返しおすすめ下さる上人の御文の一通一通が、上人の信生活の根源であることを知らされ、御文のおこころがいよ〳〵心にしみて参りました。昔の講師の方が、御文を讃仰されて「言光録」とたたえられていますが、もっともものこととうなずかされることであります。

又、御一代聞書に「御文の外に法門があると思うのは非常なあやまりである」とも「御文は、阿弥陀如来の御掟なり」と申していられますし、御文の中に「阿弥陀如来の仰

せられけるようは、末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの罪は如何程深くとも、われを一心にたのまんものはかならずすくう」と、如来の御代官としての仰せがそのまま誌されてあります。

更に御入滅を前にされた老上人が、枕頭に弟子を呼ばれ、御文を読まされて、御自ら随喜の涙を流されたことも誰も知る感銘深いことであります。

こうしたことを申しますと、蓮師をあまりに偶像視すぎると思われ勝でありますが、これは真実の御姿をそのままに申しているだけであります。それにつけましても、日本は有難い国でありまして、草深いところ、塵埃の立ちこめる中にも美しい念仏の花が開き、信心の香りがただようている人々が居られます。そうした人々の言行が、仏智から自然にあらわれている尊さに心うたれることが度々であります。「信心成得の人は、仏より言わしめられるあいだ人は聞いて信をとるなり云々」と蓮師もたたえて居られますが、名も無い、篤信の方々にそれを見聞するのであります。そして火に近づけば熱く、氷にさわると冷いと感じるように、そうしたよきひとびとから直々に仏の大悲心のひらめきを感佩もうすことであります。岡山医大の故・生沼曹六教授が、いつも一つ話のように、御郷里の新潟に居られた一介の篤信の老婆の逸話をされて「こうしたお婆さんにあうと仏様がうたがえなくなる」とよく云われたことを思い あわせます。

牛歩遅々で、まことに鈍感な私のたど〳〵しい歩みながら、種々のよき人々に育てられて蓮師の御言葉が身にしみ始めました頃、博多の萬行寺の七里和上の著書をひもといて居りますと、和上が、蓮師のお教化の三大眼目として

一、一心帰命〈一心一向に弥陀をたのめ〉

二、称名報恩〈この上の称名は御恩報謝〉

三、仏法無我〈われはと思うこころあし〉

をあげて下さっていることを知り、この三項目についていろいろと信味させて頂いて居ります。

一、一心帰命

昔から上人の御徳を讃仰されているなかで、その御教化の上で「代々の高僧方も一心に弥陀をたのめとはお勧め下さるけれども、何とおたのみ申すかということが明らかにされていないのに、ひとり蓮如上人は、後生たすけたまえと弥陀をたのめと水際立ててお教え下さる」という点を特にあげてあります。

さて「後生」とは「のちの生」で「往生」のことであります。「往生ほどの一大事、凡夫のはかろうべきことにあらず、ひとすじに如来にまかせ奉るべし云々」とありますのも、後生の大事さを教えられるもので、上人の仰せと相通じるものであります。

ここで思案しなければなりませんことは、即身成仏と往生成仏ということについてであります。私共が聖者の道をそのまま実践して、この身このまま仏と成ることが出来るのであれば、往生の道は無用であります。然しその道を実行して、自分自身が智目も行足も欠く身、いずれの行も及び難い身と知らされる時、現世のさとり、即身成仏ということは断念するほかはないのであります。

正法の時機とおもえども　底下の凡愚となれる身は
清浄真実のこころなし　発菩提心いかがせん。
自力聖道の菩提心　こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は　いかでか発起せしむべき。
三恒河沙の諸仏の　出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせども　自力かなわで流転せり。

と祖聖の述懐せられる通りであります。

元祖、法然聖人が浄土宗をひらかれたのも、一切経を五回繰り返されて「わが智ひるがえってくらし」と歎き、あらゆる行法を修習せられては「わが機すべて及び難し」と行き詰まられた四十三才の時、その十悪愚痴の者の救いが選択本願の念仏にましましたと善導大師に教えられて「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏、法蔵因位の昔かねて定めおかるるをや」と随喜渇仰されたのであります。

源信僧都も「余が如き頑魯の者、あにあえてせんや」とわが身を捨てて、ひとえに念仏に帰していられますが、現実のさとりということに絶望する外はない者には、後生の問題、往生成仏の道以外に、すくいの道は絶えてないのであります。上人はこのことを知りつくされて、

「今度の一大事の後生、たすけたまえと弥陀をたのめ」

と単刀直入にお勧め下さるのであります。

次に「たのむ」というお勧めでありますが、「たのめ」と聞かされると「どうたのんだらよいか」とはからいまどい、途方にくれるのでありますけれど、古歌に

たのむとは言葉にあらず身にあらず
こころにあらぬ　こころなりけり

とありますように、言葉に出して、ドウゾとたのむのでもなく、手を合せ身体を伏せて願うことでもなく、また心の中でおたのみ申す〳〵と祈念することでもありません。

元来、我執我慢のかたまりともいうべき我々は、純粋なたのむ心などおこし得ないのであります。それにつけまして忘れ得ませぬことは、私の医学生だった頃、学長であっ

た田中文男先生が晩年になられて「香川豊彦先生に導かれてキリスト教に入って三十年になるが、一つ苦になってならぬことがあった。それは言葉の祈りは出来ても真実の祈りが出来ぬことでした。ところが親鸞聖人の教えを聞くと祈り得ぬ者に、祈れと言われずに、祈り得ない者をよく理解して下さって、その者に救いの手をさしのべて下さるのがお念仏であると教えられこれで永年の心のしこりが解けました」とのお手紙を頂きました。

二河白道の譬喩に、弥陀如来は西岸上にあって「一心正念直来」とお呼び下さるとありますが、池山先生はこれを「オネガヒダカラ スグキテオクレヨ」と、迷い子を待ちわびる親の心になぞらえて意訳して下さいました。切々哀々の悲心のまことが「かくの如きの我等がためなりけり」「親鸞一人がためなりけり」と知らされたところ、おのずとたのむ一念も発起せしめられるのであります。そしてそのまま「たのもしさ」として信の相続があるのであります。親を求めて泣いた子が、親の手に抱かれて、親をも忘れてやすらぐたのもしさであります。

二、称名報恩

法然聖人が選択本願の念仏に帰入せられて、一切の凡夫に「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と弥陀大悲の至極を御勧め下さったのであります。親鸞聖人も、「他力の悲願はかくのごときの我等がためなりけり」と随喜せられました。

ところが、法然聖人の仰せを律法的にいただいて、たすかるための念仏をはげむような傾向が増えたのであります。有名な信行両座を提唱された時、信の座につく者は僅かに四五輩で、あとは自力念仏の人々でありましたが、蓮如上人の時代にもほとんどの念仏者が、自力にほだされていて、親鸞聖人の御意趣にそむき、真宗の真意を取りおとしていたのであります。そこに法灯をつがれた蓮如上人が、灯油に難儀せられて、月明りで聖教を読まれるとか、御子達の裾（おむつ）を洗われたなどと伝えられる程でした。

ここになみ〳〵ならぬ御苦労によって、聖人の真意「称名報恩」と明示されて、玉石混合のないようにして下されたのであります。正信偈にも「唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩」とありますが、歎異抄には「すべて往生にはかしこき思いを具せずして、ただほれぼれと如来の御恩の深重なることを常に思い出しまいらすべし、しかれば念仏も申され候、これ自然なり云々」とあります。

上人はこれを「この上の称名は如来わが往生を定めたまいし御恩報謝の念仏と心得べきものなり」と御文にはかがさずお示し下さるのであります。

むかし石童丸は父を尋ねてはるばる九州から高野の山にのぼり、父を呼び続けましたが、修行のさまたげとて、父が答えてくれなかったので、空しく山を下りました。念仏は仏を求めて呼ぶ声ではなく、仏に遭うたよろこびの声であります。

このこころをお伝え下さるために、有縁の地を歩まれて、御晩年に御足に草鞋のひもの跡が消えなかったとありますが、全くなみ〳〵ならぬ御苦労のおかげで真宗再興の偉業を成し遂げて下さり、中興上人と讃仰申して居るのであります。

三、仏法無我

仏法が無我の教であることは万人のよく知ることであります。然し、単に頭で理解する、所謂智解だけではありません。儒教にも知行（ちこう）の合一をきびしく勧められます。孔子は「述（の）べで作らず、集めて大成す」と、三皇五帝の教えをそのまま集めて述べるばかりであると無我の立場を表白しております。

さて、無我ときいて、それが身につかないと、論語読みの論語知らずに終りますが、上人の御一代聞書を頂きますと、お生活の上にその徳光が随所に輝いていることを知らされます。

「われはとおもうこころあし」
「まいらせごころあるべからず」
「何事も如来の御用なり」

というように枚挙にいとまがありません。また、

「心得たと云うは心得ぬなり」と言い放たれて、心得顔の者にきびしく反省をうながしておられます。

曇りのない凹凸のないガラスを通して、外の景色がそのままに映ってまいります。親鸞聖人の正信偈の結びは「道俗時衆共同心、唯可信斯高僧説」で、真実の前に一切人と共にぬかづいていられる無我のお姿にふれるのであります。

ここに釈尊をはじめとし、三国の高僧達がたどられた無我の大道こそ、そこに不滅の真実が輝くのであります。何れの時代でも、何れの国でもここに立脚しないと、自滅する外はありません。特に現代のように、我是なり、彼悪しの独善のもとに戦いが続き、或は無定見で日和見主義に堕している時にこそ、この無我の教に帰して、再出発すべきことを痛感してやみません。

あとがき

暑中御見舞申し上げます。

本月は近角常音先生の御忌月に当りますので、御郷里の西源寺での御法話をいただきました。筆録して下さった大字三右ヱ門様も亡くなられました。御晩年のことで、御身体もお弱りの中での「摂取不捨」の御慈悲の至極の御法語を頂きました。「どこどこまでものお慈悲ということは私がどこどこまでもどうにもならぬということである」とは私自身がお聞きしたお言葉である。星流れ歳移りお別れして三十年になりました。

福島先生の「三願転入」は信の道を旅する者への大切な道しるべであります。本誌で随分前に記載させていただきましたが、再びいただきました。

井上様は、私共が持つ律法的傾向と放縦的傾向による聞き間違いを指適下さり、自然法爾の妙味をお述べ下さいました。良寛さんの歌に「手にさわるものこそなけれ法の道それがそのままそれにありせば」を連想いたしました。

西元様は、善財童子求道の姿をいつも紙面に描いて下さいます。心して聞けば、岸打つ波も、吹く風も、法音ならぬものはないはずでありますが、聞き流し、見落して空しくすごす身を省みさせられることです。

木村様は、歎異抄による念仏詩を書いて下さっていますが、すこし無理されて心臓に障りがありました由、一字一字を大切に誌して下さる真剣さに心うたれますことです。

蓮如上人の御一代聞書について井上様が度々お述べ下さいましたが、今度あらためて蓮如上人の徳風の一端を讃仰いたしました。今回私に気づかせて頂きましたことは、上人が特に人生の無常を強くお説き下さるには、仏心の大悲に照護されて、無常を無常と自覚せられたことによるということでありました。法に照らされて、自己の罪悪が知らされるのと同じであります。

○

お心配おかけしております私の痼疾も、退院して三ケ月検診の時、無事と聞いてホッとしていますが、老化による体力の恢復がおそく、まだ休構させて頂きます、御諒承願います。

◇――◇――◇

慈光　第三十四巻　第八号　昭和五十七年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町　二ノ八八　花田正夫
電話　八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町　二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋六一〇四七〇番
郵便番号　四五七